

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評價	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
高所麻酔成分	アミノ安息香酸エチル	軟膏はあるが、ここでは痔疾用薬であるのでアネステジン「ホエイ」内服で代用		局所麻酔薬であり、痛感温度感覚を刺激して作用を発現する。			頻度不明(食欲不振、悪心、口渇、便秘、下痢、メトヘモグロビン血症)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴 ・乳幼児(メトヘモグロビン血症をおこすおそれ)	高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人				長期連続投与は避ける。		通常、成人にはアミノ安息香酸エチルとして、1日0.6～1gを3回に分割経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。 高齢者では減量するなど注意すること。	下記疾患に伴う疼痛・嘔吐 胃炎、胃潰瘍

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ				薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)				症状の悪化につながるおそれ
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に関するもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン ベルカミン注 表面麻酔に類似のため使用	感覚・求心神経繊維のNa ⁺ チャネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエピネフリンを添加して用いる		振戦、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眩暈、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	本人又は両親、兄弟に気管支喘息、発疹、蕁麻疹等のアレルギー反応を起こしやすい体質。高齢者。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。					使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。 仙骨麻酔 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人10~30mgを使用する。 伝達麻酔 (基準最高用量:1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人3~40mgを使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量:1回40mg) 0.05~0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、通常成人1~40mgを使用する。 表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1~2%液にエピネフリンを添加したものを、塩酸ジブカインとして、噴霧または塗布する。 ・眼科領域の麻酔には、0.05~0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人には1~5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人男子10~20mg、女子3~7mgを使用する。 ・膀胱粘膜麻酔には、0.025~0.05%液にエピネフリンを添加したものを、通常成人10~20mgを使用する。 ・局所鎮痛には、0.025~0.05%液を用い、適量を使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエピネフリンを添加したものを、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1~2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 副作用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 に伴う使用 環境の変化			
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ				
高所 麻酔 成分	塩酸プロカ イン注「ホ エイ」 局所麻酔に 類似のため 使用	合成局所麻 酔薬の原型 であり、感覚 ・求心神経線 維のNa ⁺ チャ ネルを遮断し、活動電位 の伝導を抑制すること により局所麻酔 作用を発現す る。粘膜への 浸透性が悪い ので表面麻酔 としては無効 である。代謝 産物が血管収 縮作用を有し、速やかに 吸収されるのでエピネ フリンの添加が必要である。			痙攣、痙れ ん等の中毒 症状(頻度不 明)	ショック(頻 度不明)	頻度不明(お むけ、不安、 興奮、霧視、 めまい、悪 心・嘔吐、メ ヘモグロビン 血症)	頻度不明(過 敏症)			重篤な出血や ショック状態(腎 臓、硬膜外麻酔 時：症状が悪化)、 注射部位またはそ の周辺に炎症(腎 臓、硬膜外麻酔 時：効果が急激に 発現)、敗血症の 患者(腎臓、硬膜 外麻酔時：敗血症 性の髄膜炎がおこ るおそれ)、メヘ モグロビン血症(腎 臓麻酔を除く) (症状が悪化する おそれ)、本剤また は安息香酸エステル (コカインを除く) 系局所麻酔薬に 対し過敏症の既往 歴	高齢者、妊婦また は妊娠している可 能性のある婦人、 妊婦末期の婦人							使用に際し、目的温度の 水性注射液として使用する。 脊髄麻酔(腰髄麻酔) 5~10%注射液とし、通常、 成人には塩酸プロカインとし て、低位麻酔には50 ~100mg、高位麻酔には50 ~100mg、高位麻酔には50 ~100mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量：1回 600mg)1.5~2%注射液とし、 通常、成人には塩酸プロ カインとして、200~ 400mgを使用する。 伝達麻酔 1~2%注射液とし、通常、 成人には塩酸プロカインとし て、10~400mgを使用 する。 漫漶麻酔 (基準最高用量：1回 1,000mg)0.25~0.5%注射 液とし、通常、成人には塩 酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用 する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリン を添加したものをを用い、 伝達麻酔、漫漶麻酔に は、通常、成人には塩酸プロ カインとして、10~100mg を使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 必要に応じエピネフリン (通常濃度1:10万~20万) を添加して使用する。	脊髄麻酔(腰 椎麻酔)、硬膜 外麻酔、漫漶 麻酔、伝達 麻酔、歯科領域 における伝達 麻酔・漫漶麻 酔
リドカイン	キシロカイン 液「4%」 表面麻酔に 類似のため 使用	神経線のナ トリウムチャ ネルをブロック し、神経にお ける活動電位 の伝導を可 逆的に抑制し、知覚神経 及び運動神経 を遮断する 局所麻酔薬 である。表面 ・漫漶・伝 達麻酔効果 は、塩酸プロ カインよりも 強く、作用持 続時間は塩酸 プロカイン よりも長い。			意識障害、振 戦、痙攣(頻 度不明)	ショック(頻 度不明)	頻度不明(眼 気、不安、興 奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐)	頻度不明(過 敏症)		本剤の成分又はア ミド型局所麻酔薬 に対し過敏症の既 往歴。	高齢者又は全身状 態が不良。心刺激 伝導障害。重症の 肝機能障害又は腎 機能障害。幼児。 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人。				過量投与で中 毒症状が現れ る。症状として中 枢神経系(不安、 興奮、意識消 失、全身痙攣な ど)、心血管系 (血圧低下、徐 脈、循環虚脱な ど)が現れる。 眼科(点眼)用 として使用しない こと。注射用とし て使用しない。			塩酸リドカインとして、通常 成人では80~200mg(2~ 5ml)を使用する。 なお、年齢、麻酔領域、部 位、組織、体質により適宜 増減する。 幼児(特に3歳以下)では 低用量から投与を開始。	表面麻酔	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
										併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの			
抗炎症成分	塩化リゾチム レフトーゼ錠	抗炎症作用、 瘢痕形成・組 織修復作用、 膿粘液の分 解と排出作 用、 出血抑制作 用					本剤の成分過敏 症の既往歴、卵白 アレルギー(アナ フィラキシー・ショ ックを含む過敏症 状)					作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。		1. 慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰排出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチムとして、60～ 270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。2. 歯 槽膿腫(炎症型)腫脹の 融解、通常、成人は1日 塩化リゾチムとして、180 ～270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量	1. 慢性副鼻腔 炎の腫脹の融 解、痰の切れ が悪く、喀出 回数が多い気 管支炎、気管 支喘息、気管 支拡張症の喀 痰排出困難、 小手術時の術 中術後出血の 場合、通常、 成人は1日歯 槽膿腫(炎症 型)腫脹の融 解の場合
	グリチルレチ ン酸	軟膏のみな ので、グリチ ルリチン酸 モノアンモニ ウム(グリチ ロン注一号) を使用	抗炎症作用	ループ利尿剤・チアジド系お よびその類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチ ン酸または甘 草を含有する 製剤)		偽アルドステ ロン症、ミオバ シー、低 カリウム血症(低 カリウム血症、高 血圧等を悪化)	高齢者、妊婦小児 等			長期運用に よる偽アル ドステロン 症		グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発、悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用、誤使用のおそれ		
抗炎症成分	酢酸ヒドロコルチゾン	コर्टリル錠外用痔疾用薬なのでヒドロコルチゾンの内服で代用	抗炎症・抗アレルギー作用を示す糖質副腎皮質ホルモンである。副腎摘出ラットの肝に対する本薬の糖原増加作用はコルチゾンの約1.5倍であり、ラット綿球肉芽腫に対する抗炎症作用はコルチゾンの約1.3倍である。 ヒドロコルチゾンの糖質副腎皮質ホルモンとしての作用は弱く、副腎摘出イヌに対する生命維持作用はデオキシコルチコステロンの約0.04倍である。		ハルピツール酸誘導体・フェニトイン・リファンピシン(代謝が促進されることにより本剤の作用が減弱)、サリチル酸誘導体(これらの薬剤との併用時に本剤を減量すると血清中のサリチル酸誘導体の濃度が増加し、サリチル酸中毒)、抗凝血剤(これらの薬剤の作用を減弱)、経口糖尿病用剤(これらの薬剤の作用を減弱)、利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く)(低カリウム血症)	感染症、線状性副腎皮質機能不全、糖尿病、消化性潰瘍、骨粗鬆症、大腿骨及び上腕骨等の骨折、ミオパチー、線内障、後囊白内障、血症(頻度不明)	頻度不明(アレルギー)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者、有効な抗菌剤の存在しない感染症、全身的真菌症、結核性疾患、単純疱疹性角膜炎(感染症を増悪させるおそれ)、消化性潰瘍(潰瘍を増悪させるおそれ)、精神病(精神病を増悪させるおそれ)、後囊白内障の患者(白内障を増悪)、線内障(眼圧を上昇)、高血圧(血圧を上昇)、電解質異常(低カリウム血症等)、血栓症(血栓症を増悪させるおそれ)、最近行った内臓の手術(創傷治癒を障害させるおそれ)、急性心筋梗塞(心破裂)	感染症、糖尿病、骨粗鬆症、腎不全、うつ血性心不全、甲状腺機能低下、肝硬変、脂肪肝、脂肪塞栓症、重症筋無力症、高齢者への長期投与、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、小児	水痘又は麻疹の既往のない患者においては、水痘又は麻疹への感染を極力防ぐよう常に十分な配慮と観察を行うこと。		運用後、投与を急に中止すると、ときに離脱症状があるため、徐々に減量するなど慎重に行なうこと。 高齢者への長期投与：感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後囊白内障、線内障等の副作用発現。 小児への長期投与：頭蓋内圧亢進症状		通常、成人にはヒドロコルチゾンとして1日10~120mgを1~4回に分割して経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1.慢性副腎皮質機能不全(原発性、続発性、下垂体性、医原性)、急性副腎皮質機能不全(副腎切除、急性器質性疾患、甲状腺炎、甲状腺腺癌に伴う急性眼球突出症、ACTH単独欠損症) 2.慢性関節リウマチ、若年性関節リウマチ(スチル病を含む)、リウマチ熱(リウマチ性心炎を含む) 3.エリテマトーデス(全身性及び慢性円板状)、全身性血管炎(大動脈炎、結核性動脈周囲炎、多発性動脈炎、ウェゲナー肉芽腫症を含む)、多発性筋炎(皮膚筋炎)、強皮症 4.ネフローゼ及びネフローゼ症候群 5.気管支喘息、薬剤その他の化学物質によるアレルギー、中毒(薬疹、中毒を含む)、血清病 6.重症感染症(化学療法と併用する) 7.溶血性貧血(免疫性又は免疫性機序の疑われるもの)、白血病(急性白血病、慢性骨髄性白血病の急性転化、慢性リンパ性白血病)(皮膚白血病を含む)、顆粒球減少症(本態性、続発性)、紫斑病(血小板減少性及び血小板非減少性)、再生不良性貧血		

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの		
												8.限局性腸炎、潰瘍性大腸炎 9.重症消耗性疾患の全身状態の改善(通末期、スプルーを含む) 10.慢性肝炎(活動型、急性再燃型、胆汁うっ滞型)(但し、一般的治療に反応せず肝機能の著しい異常が持続する難治性のものに限る)、肝硬変(活動型、難治性腹水を伴うもの、胆汁うっ滞を伴うもの) 11.サルコイドーシス(但し、両側肺門リンパ節腫脹のみの場合を除く) 12.肺結核(粟粒結核、重症結核に限る)(抗結核剤と併用する)、結核性胸膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性腹膜炎(抗結核剤と併用する)、結核性心臓炎(抗結核剤と併用する) 13.脳脊髄炎(脳炎、脊髄炎を含む)(但し、一次性脳炎の場合は頭蓋内圧亢進症状がみられ、かつ他剤で効果が不十分なときに短期間用いること)、末梢神経炎(ギランバレー症候群を含む)、筋強直症、多発性硬化症(視束脊髄炎を含む)、小脳萎縮、顔面神経麻痺、脊髄脚網膜炎 14.悪性リンパ腫(リンパ肉腫症、細網肉腫症、ホジキン	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ		適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ				長期使用による健康被害のおそれ								
																			病、皮膚細菌症、菌状糸肉症)及び類似疾患(近縁疾患)、好酸性肉芽腫、乳癌の再発転移 15.特発性低血糖症 16.原因不明の発熱 17.副腎摘除、副腎皮質機能不全患者に対する外科的侵襲 18.蛇毒・昆虫毒(重症の虫さされを含む) 19.卵管整形術後の癒着防止 20.★湿疹・皮膚炎群(急性湿疹、亜急性湿疹、慢性湿疹、接触皮膚炎、貨幣状湿疹、自家感受性皮膚炎、アトピー皮膚炎、乳・幼・小児湿疹) 21.内服・視神経 22.急性・慢性中 23.難治性口内 ★印の附されて		

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量(上限)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの						特異体質・アレルギー等によるもの	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ			
抗炎症成分	酢酸プレドニゾン プレドナマ注 20mg(酢酸プレドニゾンがないためリン酸プレドニゾンで代用)	ラットの頸膜内注射注入潰瘍性大腸炎モデルに対し、リン酸プレドニゾンにて有意な潰瘍面の縮小効果が認められた			ハルピツール酸誘導体(フェンバルピタール)・フェニトイン・リファンピシン(本剤の作用が減弱)、サリチル酸誘導体(併用時に本剤を減量すると、血清中のサリチル酸誘導体の濃度が増加し、サリチル酸中毒)、抗凝血剤(抗凝血剤の作用を減弱)、経口糖尿病用剤・インスリン製剤(これらの薬剤の作用を減弱)、利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く)(併用により、低カリウム血症)、活性型ビタミンD3製剤(高カルシウム血症、尿路結石があらわれる)、シクロスポリン(副腎皮質ホルモン剤の大量投与により、併用したシクロスポリンの血中濃度が上昇)、マクロライド系抗生物質(副腎皮質ホルモン剤で、作用が増強)	誘発感染症、感染症の増悪、続発性副腎皮質機能不全、糖尿病、消化管潰瘍、消化管穿孔、肺炎、うつ状態、痙攣、骨粗鬆症、大腿骨及び上腕骨等の骨折、無菌性壊死、ミオパシー、線内障、後囊白内障、中心性漿液性網脈絡膜症、多発性皮膚部網膜色素上皮症、血栓症、心筋梗塞、動脈瘤(頻度不明)	アナフィラキシー様反応、喘息発作(頻度不明)	頻度不明(月経異常、下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進、多幸症、不眠、頭痛、めまい、筋肉痛、関節痛、満月様頭眩、野牛肩、望業負平衡、脂肪肝、浮腫、血圧上昇、低カリウム性アルカローシス、網膜障害、眼球突出、白血球増多、多毛、脱毛、色素沈着、皮下出血、紫斑、線条、そう痒、発汗異常、顔面紅斑、創傷治癒障害、皮膚菲薄化、脆弱化、脂肪線炎、発熱、疲労感、ステロイド腎症、体重増加、精子数及びその運動性の増減、尿路結石)、高齢者:長期投与時に感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後のう白内障、線内障、小児:発育抑制、頭蓋内圧亢進症状や高血圧性脳症、神経障害・抗体反応の欠如(副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種した場合)。		禁忌:本剤の成分に対し過敏症の既往歴 原則禁忌 1.有効な抗菌剤の存在しない感染症(感染症が増悪するおそれ) 2.消化性潰瘍(消化性潰瘍が増悪するおそれ) 3.精神病(精神病が増悪するおそれ) 4.結核性疾患(結核性疾患が増悪するおそれ) 5.単純疱疹性角膜炎(単純疱疹性角膜炎が増悪するおそれ) 6.後囊白内障(後囊白内障が増悪するおそれ) 7.線内障(線内障が増悪するおそれ) 8.高血圧症(高血圧症が増悪するおそれ) 9.電解質異常(電解質異常が増悪するおそれ) 10.血栓症(血栓症が増悪するおそれ) 11.最近行った内臓の手術(創傷治癒を遅延するおそれ) 12.急性心筋梗塞(心破裂)	感染症、糖尿病、骨粗鬆症、腎不全、甲状腺機能低下、肝硬変、脂肪肝、脂肪塞栓症、高齢者、薬物、食物、添加物等に過敏な喘息患者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦	水痘又は麻疹の既往のない患者においては、水痘又は麻疹への感染を極力防ぐよう常に十分な配慮と観察を行うこと。		連用後、投与を急に中止した場合:ときに発熱、頭痛、食欲不振、脱力感、筋肉痛、関節痛、ショック等の離脱症状。	高齢者に長期投与した場合:感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後囊白内障、線内障等の副作用があらわれやすい。		通常、成人は、1回置リン酸プレドニゾンナトリウムとして22mg(リン酸プレドニゾンとして20mg)を注射投与(直腸内注入)する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	潰瘍性大腸炎、限局性腸炎

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化			
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ				
鎮 痒 成分	塩酸ジフェン ヒドラミン	ベネ錠	抗ヒスタミン 作用。 H1受容体に 対しヒスタミン と競合的に拮 抗すること により作用を あらわす。 ヒスタミン遊 離抑制作用。		アルコール・中枢神経抑制 剤・MAO阻害剤(中枢神経抑 制作用が増強)、抗コリン作 用を有する薬剤(抗コリン作 用が増強)			頻度不明(口 渴、悪心・嘔 吐、下痢、め まい、倦怠 感、神経過 敏、頭痛、眠 気) 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作	頻度不明(過 敏症)		横内障(悪化)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(悪化)	授乳中の婦人、未 熟児、新生児、妊 婦又は妊娠してい る可能性のある婦 人、高齢者							塩酸ジフェンヒドラミンとし て、通常成人1回30~ 50mg(3~5錠)を1日2~3 回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	痔瘻疹、皮膚 疾患に伴うそう 痒(湿疹、皮膚 炎)、枯草熱、 アレルギー性 鼻炎、血管運 動性鼻炎、急 性鼻炎、春季 カタルに伴うそ う痒
鎮 痒 成分	クロタミトン	オイラックス	本剤は抗ヒス タミン作用を 示さないこと、 またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を与 えないことな どから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序 を異にすると 考えられる。 一般には、皮 膚に軽しやく 熱感を与え、 温覚に對 するこの刺激 が競合的に そう痒感を消 失させるとい われている。					0.1~5%未満 (熱感・しゃく 熱感、刺激症 状(ピリピリ 感、むりむり 感等)、発赤、 発赤増強・紅斑 増悪、分泌物 増加、浸潤傾 向)	5%以上(過敏 症)		本剤に対して過敏 症の既往歴	・高齢者・妊婦又は 妊娠の可能性の ある婦人への大 量又は長期にわた る広範囲の使用、 乳幼児・小児に 対する広範囲の 使用	炎症症状が 強い浸出性 の皮膚炎・適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。	・眼あるいは眼 周囲及び粘膜に は使用しない。 ・塗布直後、軽 い熱感を生じ ることがある が、通常短時 間のうちに消 失する。	・高齢者、妊婦 又は妊娠して いる可能性 のある婦人 には、大量・ 長期にわた る広範囲の 作用は避け る		通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の 可能性のある婦人：大量 かつ広範囲の使用は避け る。	湿疹、蕁麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス		

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 適用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
	d-マレイン酸クロルフェニラミン 2mg	抗ヒスタミン作用		中脳神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互作用を増強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眩暈、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を催すことがあるので自動車の運転等危険を伴う機種の操作				本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(健康等の重篤な反応があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状腺機能亢進症、狭窄性消化性潰瘍、幽門十二指腸通過障害、循環器系疾患、高血圧症、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人						d-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うしゃみ・鼻汁・咳嗽。

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 留性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化			
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
止血成分	塩酸エトナドロンリン ABCスプレー 点鼻薬、塩酸塩がなく、硝酸塩	直接局所粘膜に適用すれば粘膜の充血、腫脹を除去する。血圧上昇作用はエビネフリンと類似であり、作用の発現はエビネフリンより遅い。	モノアミン酸化酵素阻害剤(急激な血圧上昇)	頻度不明(睡眠、頭痛、めまい、痲痺、不眠症、脱力感、血圧上昇、心悸亢進、不整脈、熱感、刺激痛、乾燥感、反応性充血、鼻漏、長期使用で反応性の低下等)	頻度不明(過敏症)	・本剤に対し過敏症の既往歴 ・2歳未満の幼児・乳児(全身症状) ・モノアミン酸化酵素阻害剤を投与中(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。急性充血期に際して使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用すること。	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。小児において、過量投与により、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。眼科用として使用しないこと。	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。小児において、過量投与により、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。眼科用として使用しないこと。	本剤は原則として6歳以上の小児及び成人に用いる。通常、成人3～5時間毎に2～3回鼻腔内に噴霧するか、又は2～4滴を鼻腔内に点鼻する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血		
止血成分	塩酸ナファゾリン 0.05%プリピナ液「チバ」 塩酸塩がなく硝酸塩	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳殻血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)	・頻度不明(眼圧等の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺激痛、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴 ・2歳未満の乳・幼児(ショック) MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠、めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。急性充血期に際して使用するか又は適切な休薬期間をおいて使用すること。	眼科用として使用しないこと。過量投与により、主なる全身作用として、血圧上昇と二次作用として臓器虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。適用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	適用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	通常、成人鼻腔内には、1回2～4滴を1日数回、咽喉・喉頭には1回1～2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤への添加には、局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2～4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血 上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長		
dl-塩酸メチルエフェドリン	dl-塩酸メチルエフェドリン散	アドレナリン作動性の気管支拡張作用と中枢性鎮咳作用を示す。	MAO阻害剤・甲状腺製剤(作用が増強)、キサンチン誘導体・ステロイド剤・利尿剤(血清カリウム値が低下)	β2刺激剤により重篤な血清カリウム値の低下	頻度不明(熱感)、0.1～5%未満(心悸亢進、顔面蒼白等、頭痛、不眠、めまい、眩暈、神経過敏、疲労等、悪心、食欲不振、腹部膨満感等、口渇)	頻度不明(過敏症)	カテコールアミン製剤を投与中(不整脈、場合によっては心停止を起すおそれ)	甲状腺機能亢進症、高血圧症、心疾患、糖尿病、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳中の婦人、小児等、重症喘息(血清カリウム低下)	過量に使用を続けた場合、不整脈、場合によっては心停止を起すおそれがある	過量に使用を続けた場合、不整脈、場合によっては心停止を起すおそれがある	dl-塩酸メチルエフェドリンとして、通常成人1回25～50mgを1日3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。一般に高齢者では生理機能が低下しているため減量するなど注意すること。	下気疾患に伴う咳嗽 気管支喘息、感冒、急性気管支炎、慢性気管支炎、肺結核、上気道炎(咽喉頭炎、鼻カタル) 蕁麻疹、湿疹		

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能・効果				
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ		適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)					使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ								
	酸化亜鉛	酸化亜鉛「エビス」	皮膚のたんぱく質と結合して被膜を形成し、取れん、消炎、保護並びに緩和な防腐作用を現す。また、浸出液の吸収及び分泌抑制により、創面又は潰瘍面などを乾燥させる。					頻度不明(発疹、刺激感)	頻度不明(過敏症)						眼には使用しないこと。吸入しない。				外用散剤(散布剤)として15～100%、軟膏剤・液剤(懸濁剤・リニメント剤・ローション剤等)として2～60% 上記濃度に調製し、いずれも症状に応じ1日1～数回患部に適用する。	効能・効果 軽度の皮膚病変の取れん・消炎・保護・緩和な防腐			
抗菌成分	イソプロピルメチルフェノール	フェノール 歯科用ではない	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)			損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)				・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。・眼に入らないように注意すること。・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。・外用にのみ使用すること。・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるため、使用しないこと。・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。]・誤飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。			効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5～2%溶液を用いる。(50～67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2～5%溶液を用いる。(20～50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3～5%溶液を用いる。(20～33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1～2%溶液を用いる。(50～100倍) 軟膏:フェノールとして2～5%軟膏を用いる。(20～50倍)					

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
抗菌成分	塩酸クロロヘキシジン	5Nヒビテン液、グルコニ酸塩を使用	抗菌作用: グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。ウイルスに対する効力は確定していない。作用機序は十分には解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。			ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)			クロロヘキシジン製剤に対し過敏症の既往歴 副鼻腔炎、耳(内耳、中耳、外耳) (難聴、神経障害) 腫、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状) 眼 産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)	薬物過敏症の既往歴 喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴			外用にのみ使用する。眼に入らないよう注意する。産婦人科用(膈・外陰部)、泌尿器科用(膀胱・外性器)には使用しないこと。創傷部位に使用する希釈液は調製後減菌する。・本剤は必ず希釈し温度に注意して使用				(1)0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) (2)0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (0.5%エタノール溶液) (3)0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液) (4)0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) (5)0.05%水溶液(本剤の100倍希釈) (0.05%水溶液)	本品は下記の濃度(グルコニ酸クロロヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 ③皮膚の創傷部位の消毒 ④医療用具の消毒 ⑤手術室、病室・家具・器具・物品等の消毒
	セトリミド	なし																	
創傷治癒促進成分	アラントイン	なし																	

外用痔疾用薬

製品群No. 30

ワークシートNo.23

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
血行改善成分	酢酸トコフェロール	ビタミンE、コペラ錠					0.1~5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)								末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果がないの月余にわたって連続と使用すべきではない。		錠剤 通常、成人には1回1~2錠(酢酸トコフェロールとして、50~100mg)を、1日2~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止